せんだい寸景

NO４　2004年11月
発行：じっかい電脳事務局

舞台はまわる　宮城野運動公園

9月半ば突然始まったプロ野球新球団の仙台進出騒動は「楽天」に軍配が上がって決着をみた。景気浮揚だの地域活性に弾みだのと地元マスコミは連日「煽り立て」ている。が、はたしてどうだろう。仙台人の旧態前とした根性がきにかかる。

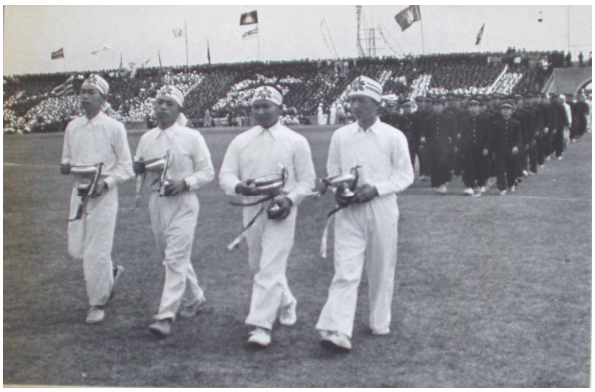
さてその「楽天」球団の本拠地はかつて「あの」一・二高定期戦の舞台となった宮城球場である。一帯は宮城野原運動公園総合運動場―（と正式にはいうそうだ）として昭和27年完成、以来ほぼ「原型」を保ったまま52年の歳月を経た。古い、狭いと今回の騒動にさいし全国に喧伝された。宮城野・五輪・萩野町・銀杏町―すっかり様相を変えた周辺の町並みのなかにあって競技場だけはまさに「保守」「頑迷」「排他」仙台人の姿そのものーといわんばかりにムカシのスガタのままだ。これが県内唯一のプロ野球開催の球場である。よくもまあほっといたものだと宮城県庁役人の無策に改めて驚嘆する。容認してきた県民性にも。

そこで冒頭の疑念がよぎる。はたして「仙台にプロ野球は根付くのか」

時は昭和36年6月、おりしも高校総体開会式が開かれた。陸上競技場を埋め尽くした県下高校応援団の歓声のなか先頭きって入場するのは前年総合優勝の一高選手団、その先頭を進む4名の選手をご覧あれ(写真上右)。左から猪狩幸郎フエンシング部・堀江忠寿ヨット部・永野忠征柔道部・稲田福治硬式庭球部の各主将。手にするは種目別優勝カップ。

いま、晩秋の日差しのなかこどもたちが走り、歓声が沸く。スタンドに立ち目を凝らす、「あの日のおとこたち」はどこに行った？燃やした青春の情熱はいまだ冷めぬか！

選手宣誓は石黒行彦野球部一塁手。巻紙をさらりと流して「風さわやかな六月・・」うんぬん、ガナらない、一高流のものであった。大会出陣前の壮行会(写真下)ではナデちゃんこと塩浦潮風先生が「いちこーはフエニックスであぁーる！」例の名調子でおおいに盛り上げたっけ。



永野忠征が死に猪狩幸郎も逝った。残ったおおかたのおとこたちとてもはや「若い力と感激の～」と歌ったころの面影なぞどこにもない。話題の中心「宮城球場」内外には改装工事始まるというニュースに別れを惜しむ多くの人々の姿があった。定期戦で「ゴロキン」こと阿部佐一郎先生が声を限りに叫んだスタンドもやがてカタチを変える。

ＪＲ仙石線が地下にもぐり、県運転免許試験場はとうのむかしに郊外に移転し運動公園東側にＪＲ貨物の操車場が出来、それもいづれ移転する。悪評の施設についてもこんどのプロ野球進出を機に「ドーム球場」建設の話が持ちあがっている。これもひとまかせ、けっして動かずーの「県民性」だもの、プロサッカーのベガルタ仙台に冷たい地元経済人の態度からみてつい悲観的になる。近くに400年の歴史をもつ榴岡天満宮がある。ホマレ高きこの天満宮「総代」が宮城球場前で開業の今野酒店主人わがじっかい今野博なそうな。